

失毛、正體自然出來給利、王法乃不盡^シ、正體乃不紛失給^ル事ヲ深欣悅^テ、新櫃奉造天所欲奉納^リ

王、兼資王、中臣、權少祐
為仲、忌部、孝友等也

〔百練抄^二七條〕永曆元年四月廿九日、内侍所神鏡奉納新造辛櫃、去年十二月廿六日、信賴卿亂逆之間、

師仲卿破御辛櫃奉取御體、於桂邊經一宿、其後奉渡清盛朝臣六波羅亭、造假御辛櫃奉納、自師仲卿姊小路東洞院家所還御温明殿也、左中將忠親朝臣依長久例候之、自今夜三ヶ夜御神樂、

〔增鏡^{十三}今日の日應〕正應も三年になりぬ、略^〇中三月四日五日の頃、紫宸殿の師子こま犬なかよりわ

れたる驚きおぼして御占あるに、血流るべしとかや申ければ、いかなる事のあるべきにかと、誰もくかくおぼし騒ぐに、其夜九日、右衛門の陣より恐ろしげなるものゝふ三四人、馬に乗りながら九重の中へはせ入て、うへにのぼりて、女孺が局の口に立て、やゝといふものをみあげたれば、

たけ高く恐ろしげなる男の、赤地の錦の鎧直垂に、緋おどしの鎧きて、たゞ赤鬼などのやうなるつらつきにて、みかど見^〇伏はいづくに御よるぞと問ふ、夜のおどいにといらふれば、いづくぞと又とふ、南殿よりひんがし、北の隅とをしふれば、南さきへ歩みゆく間に、女孺内より参りて、權

大納言典侍殿、新内侍殿などにかたる、うへは中宮の御方にわたらせ給ひければ、對の屋へ忍びてにげさせ給ひて、春日殿へ女房のやうにて、いとあやしきさまをつくりて入らせ給ふ、内侍劔

璽とりて出づ、女孺は玄象鈴鹿とりてにげゝり、略^〇中此男をば朝原のなにかしとかいひけり、中略かゝる程に、二條京極のかゝり屋みこの守とかや、五十餘騎にて馳参て時をつくるに、合する

聲わづかに聞えければ、心やすくて内に参る、御殿どものかうし引かなぐりて亂れ入るに、かな

はじと思ひて、夜のおどいの御しとねの上にて、朝原自害しぬ、

〔百練抄^九安徳〕壽永二年七月廿二日、源氏軍兵已着東坂本、相率大衆登山云々、上皇^〇後召諸卿有議

定、依賊徒事可有行幸院、可憚復日哉、賢所渡御城外無先例、可憚哉、武士猶可守護院御所哉、三ヶ條